

オンライン講義形式の選択における倫理的問題について

金成 祐人

帝京大学宇都宮キャンパスリベラルアーツセンター

概要

2020年度、新型コロナウイルスの影響で通常の対面講義が不可能となり、オンラインでの講義実施を余儀なくされた。この非常事態のなか、オンライン講義の具体的な実施方法は各教員に委ねられ、教員は担当する科目の特性も考慮しながら、最適な講義形式を模索することとなった。本稿は、オンライン講義形式の選択にいかなる倫理的問題が潜んでいるのかを明らかにし、非常事態においては、「最も弱い立場」の人に配慮した講義形式の選択をすべきであることを示す。また、2020年度の講義で実施した講義形式と学生への通知の仕方を具体的に紹介し、講義の成果と残された問題を提示する。

1. はじめに

2020年度、新型コロナウイルスの影響で通常の対面講義が不可能となり、オンラインでの講義実施を余儀なくされた。この非常事態のなか、オンライン講義の具体的な実施方法は各教員に委ねられ、教員は担当する科目の特性も考慮しながら、最適な講義形式を模索することとなった。各科目には固有の性質があると想定され、教員が講義形式を選択できることは望ましいことである。しかしその選択の際に、考慮すべき倫理的問題があることは必ずしも注意されていなかったように思われる。そこで本稿では、オンライン講義形式の選択にいかなる倫理的問題が潜んでいるのかを明らかにし、非常事態においては、「最も弱い立場」の人に配慮した講義形式の選択をすべきであることを示す。

最初に、主要な講義形式として、同時双方向型(テレビ会議方式等)とオンデマンド型(インターネット配信方式等)の二種類の講義形式の特徴を概観する(2節)。次に、講義形式の選択に伴う倫理的問題について、ステークホルダーの観点から論じる(3節)。そこで「最も弱い立場」のステークホルダーとみなされた学生に配慮し、か

つ筆者担当科目に期待されている役割を最大限果たすために実施した、学生自身で受講の仕方を選択できる講義について、学生への通知を含めて紹介する(4節)。最後に、この講義の成果と残された問題を振り返る(5節)。

2. 二種類のオンライン講義形式の特徴

2020年度のオンライン講義実施にあたって、本学では以下の二つの講義形式が提示されていた。

- (1)同時双方向型(テレビ会議方式等)
- (2)オンデマンド型(インターネット配信方式等)

以下、それぞれの長所と短所を挙げてみよう。

(1)の長所は、対面講義に近いかたちで実施しうることである。そのため、ある程度は従来の講義スタイルを維持することが可能である。教員が学生の意見を取り入れながら講義を展開するようになれば、学生はモチベーションを保ちやすく、他の学生の様子も分かり、安心感や大学への帰属意識が生じることも期待できる。

(1)の短所として、以下の点を挙げるができるだろう。まず、通信障害が起こる(Wi-Fiの不具合や大学のサーバーダウンなど)と、講義が成立しない恐れがある。また、通信量が多くなるため、自宅にWi-Fi環境がなく、スマートフォンしか持つ

ていない学生は通信プランによっては講義に参加できない可能性がある。さらに、ある程度対策が可能ではあるものの、学生の私的空間が映ること等によってプライバシーの保護に問題が生じる(もちろん、学生側の映像をオフにしたり、背景画面を変更するなどの対策が可能である。ただ、そうした配慮や操作の仕方について十分な理解を得て大学としての統一の方針を作る時間的猶予は当時ほとんどなかった。さらには、映像(や音声)をオフにすることを前提にすると、顔の見えないやり取りとなり、対面講義に近い講義の実施という利点はある程度失われてしまうだろう)。音声だけの参加の場合であっても、長時間の動画視聴によって体調を崩す可能性があることも懸念される。最後に、そもそも多くの教員にとってオンライン上での講義は初めての試みであり、講義当日に失敗のないよう、短期間で準備するのは困難であると言える。

(2)の長所としては、学生がいつでも好きなときに講義を受講することができるという利便性を挙げることができるだろう。再生を中断したり、何度も視聴することが可能なため、自分のペースで受講することもこうした利便性の一つである。また、通信障害が起きたとしても、通信が復旧次第取り組めるため、影響を受けづらい。教員にとっても、講義当日の通信状況に左右されずに講義の準備ができるという利点がある。

(2)の短所としては、教員や他の学生とのコミュニケーションが不足し、モチベーションが保ち難いという点が挙げられる¹。また、その場で質問をすることができず、教員にメールや掲示板を通じて質問しなければならないため、学生によっては質問のハードルが上がると考えられる。また、あらかじめ収録した講義動画を視聴させる場合には、通信量が多くなり、通信に制限がある学生の受講機会を失わせる恐れがある。ただし、動

画を含まない資料を配布する、動画での説明を一部に限定するなど、教員側で通信量の調整は可能である。

3. 講義形式の選択に伴う倫理的問題

二つの講義形式に関する上記の長所と短所は、決して網羅的というわけではないが、それでも次のようなことを示すには十分である。つまり、同時双方向型を取れば、対面に近いかたちでの講義が可能となり、学生のモチベーションも保ちやすいが、通信に関する問題を抱えるのに対し、オンデマンド型では通信の問題をある程度解消することができるものの、対面と同程度の学習体験やモチベーションの維持は期待できないというジレンマがあるということである。このようなジレンマに直面して、どのような理由でどの講義形式を選択すればよいだろうか。

オンラインという新たな技術導入に伴って、「よりよい」講義形式はどれか、どの講義形式を選択「すべき」かを検討すること、またどのような人に配慮しなければならないかを検討することは、倫理の、特に技術者倫理の問題圏域である。そこで、技術者倫理等で論じられる「ステークホルダー」という概念を用いてこの問題を考察しよう。「ステークホルダー」とは、「利害関係者」と訳されることもあるように、何らかの倫理的判断によって影響を受ける関係者全員を指す。ステークホルダーには、弱い立場や見えにくい立場の人がおり、倫理的判断の際にはそうした人たちへ配慮が欠かせないとされる²。

本稿のテーマである講義形式の選択の場面に当てはめて考えてみると、ステークホルダーとして、学生、学生の保護者、科目担当教員、教員の家族、他の教員、教務チーム、他の大学職員等が挙げられるだろう。また、この場合の「弱い立場」のステークホルダーは、講義を受ける学生だと言

¹ ただし、オンデマンド型かつ資料配布型の講義形式であっても、「敬体(です・ます体)」を用いた「語り口調」の導入等の工夫により、対面型講義に見られるような教員と学生の〈情緒的紐帯〉を構築できるとする研究もある。小園[1]を参照。

² 札野・栃内[2], 51-54 頁を参照。ステークホルダーは、「ある道徳的行為者の意思決定や行為に、直接的および間接的な影響を与えたり、それらによって影響を受けたりする存在である」(52 頁)と定義されている。

うことができる。なぜなら学生は、教員の講義形式の選択に一方的に従わざるを得ないからである。さらに、「最も弱い立場」にあると言えるのは、オンライン講義を受けるのに十分な通信環境や通信機器を持っていない学生であると考えられる。自宅にネット回線がない学生、パソコンやタブレットを持たず、スマートフォンしか持たない学生、そうした通信機器を持ってはいるが、通信容量に制限がある学生は、「最も弱い立場」に分類される。こうした学生は、同時双方向型の講義を教員が選択した場合に、受講機会を奪われることが予想される。

また、(直接会ったり連絡を取ったりすることが通常ないため)見えにくい立場の人として、学生の保護者を挙げるができる。保護者は講義を直接受けるわけではないが、その多くは学生の授業料を支払う立場にあり、教員の講義選択の判断に講義の質の面で影響を受けている。従来と授業料が変わらない以上、対面と変わらない講義の質が求められると想定される。特にオンデマンド型を選択した場合、それが従来の対面型講義と比べて質が低下しないよう配慮する必要があるだろう。

以上のように、ステークホルダーのなかには弱い立場や見えにくい立場の人たちがいるが、その中でもどのような人に最も配慮して講義形式の判断を下すべきだろうか。最も配慮されるべきは、最も弱い立場にいる学生と、その保護者であるように思われる。コロナ禍という緊急事態において、優先すべきは学修機会の確保である。そのため、通信容量が極力少なくなるようなオンデマンド型の講義を基本とすべきだと言える。

では、その場合には同時双方向型の講義形式は断念すべきなのだろうか。著者の担当する、「哲学」「倫理学」の講義は、単に哲学者・倫理学者の思想内容を理解するに留まらず、講義内での議論やグループワーク、発表などのアクティブ・ラーニングを通じて、論理的・批判的思考力を磨くこと、他者との対話を通じてより良い考え方を導き出すことを重要な役割と捉えている³。そのため、従来は学生たちが相互に意見を出し合える環境づくりに重点を置いてきた。また、「ドイツ語」の講義においても、学生同士のペアワークや発音練習はドイツ語の学修に極めて効果的であるものの、そうした活動は同時双方向型の講義形式を取らなければ実施が困難である。次節では、実際に2020年度に取った講義方針を紹介しつつ、二者択一に陥らない講義形式の選択について検討する。

4. 複数の受講形態を許容する講義

相互に意見を出し合える講義スタイルを維持しながら、十分な通信環境を整えることができない学生の学修機会を失わせないために、2020年度の講義は以下の三種類の受講形態を許容することにした⁴。

A: Blackboard Collaborate Ultra を使用した同時双方向型講義

B: 上記の記録動画を視聴し、講義スライドを読むオンデマンド型講義

C: 講義スライドを読むオンデマンド型講義

まず、最も弱い立場にいる学生に対する配慮として、Cの受講形態を設定した。オンデマンド型

³ 日本学術会議[3]では、哲学の学修が単に知識を得ることに留まらず、論理的・批判的思考力などのジェネリックスキルの育成という要請に応えるものであると言われている(iii)。なかでも、「哲学の学修によって涵養されるジェネリック・スキルすなわち「汎用的理性」として、「学修活動を支える一般的スキル」、「問題発見のスキル」、「問題分析・解決のスキル」、「双方向的コミュニケーションのスキル」が挙げられている(10頁, 22頁)。

⁴ 可能性としては、すべての学生に対して同時双方向型の

講義を受講可能な通信環境・通信機器を提供するという手段も考えられる。具体的には、ノートパソコンやマイク、通信容量に制限がないルーター等は無償で貸し出すか、購入するための資金を提供するなどである。そのようなことが可能であれば、講義形式の選択には本稿で示したような倫理的問題が生じないかもしれない。だが、実際にはそのような手段を取ることはできなかったため、ここでは可能性の示唆に留める。

だとしても、動画を含めれば通信量は多くなってしまふ。そのため、通信量に制限がある学生でも問題なく受講できるよう、動画の視聴を必須とせず、それだけで理解可能なスライド資料を読み解かせることにした。講義内容に関する質問は、掲示板やメール等で受け付けた。

次に、著者担当科目で重視している思考力や対話力の涵養という役割を対面講義と遜色なく果たすことができるよう、A の受講形態を設定した。学生には音声やメッセージを通じて意見を出してもらい、一方的な講義にせず学生の思考を促した。

最後に、その中間の受講形態として、ある程度の通信容量なら確保できるという学生向けに、A の記録動画を視聴するオンデマンド型の受講形態 B を設定した。

学生には、通信状況の改善等が見られた場合には、学期途中であっても A や B への受講形態の変更を認め、また逆に、通信状況が悪化した場合には B や C への変更も許容した。どの形態を選択しても、同内容の小テスト(およびミニレポート)を毎回受験させることで、学期中の出席と成績を集計し、成績評価に不平等が生じないよう配慮した。

ただし、同時双方向型講義は対面講義に近い形式ではあっても、いくつかの変更点を加えざるを得なかった。まず、図書館の利用が困難な学生がいることを考慮し、従来必須としていた最低一つの文献の要約を免除し、講義内容の要約と考察を期末レポートとして課した。また、従来は学生による発表を実施していたが、システム・機器上の問題が多数起こる懸念があったため、2020 年度は実施を見送った。

次に、こうした特殊な講義形式を学生にどのように伝えたかについて、「倫理学」講義で掲載した学生へのお知らせ文を以下に記載することで示す(フォーマットは本年報に合わせたものに変更した)⁵。

- 本講義は、LMS のテレビ会議(Collaborate) (A)、テレビ会議の録画(主に解説部分)視聴(B)、講義資料を読む(C)のいずれかの手段で学修し、LMS 上の小テストに合格する(満点をとる)ことで、講義期間の成績をつけます。通常は A を、通信が不安定であったり、通信制限があったりする学生は B もしくは C を選んで受講してください。なお、途中で受講の仕方を変更しても構いません(B もしくは C で受講していたが通信環境が整ったので A で受講する、テレビ会議の通信が切れてしまったので B で内容を確認する、B で受講していたが通信制限がかかってしまったので C で受講するなど)。
- なお、B や C は通信の問題が発生した場合や、金銭的な事情等で通信環境が整わない学生でも学び続けられるよう配慮したものですので、通常は A で受講するようにしてください。
- 教員は、講義資料をアップロードしたうえで、正規の講義時間にテレビ会議(Collaborate) (A)を行い、講義終了後にその録画動画(主に解説部分)を LMS 上にアップロードします。
- A・B・C のいずれの場合でも、LMS 上の小テストに合格することで、成績評価に加算する点数をつけます。小テストは毎週、1 週間限定で表示され、何度でもやり直すことができます。無制限にやり直しができるため、合格点は満点のみとします。
- LMS で掲示板を開放しますので、学生同士の質問や交流に役立ててください。教員も木曜日の 13:00-14:00 頃に掲示板にアクセスし、学生同士では解決できなかった質問等に答えます。
- 個人情報を含む場合などは、LMS の「連絡先」から教員に連絡をとってください。基本

⁵ 「倫理学」は後期実施科目であり、ある程度通信環境が整備されているであろうことを考慮し、同時双方向型で受講

することを推奨している。

的に平日の勤務時間に返信します。なお、教員へのメールはフォーマルな形式で送るようにしてください(宛名(「〇〇先生」), 自分の名前, 学籍番号, 質問する科目名を書くなど)。また, 講義内容やテストに関する質問は掲示板を利用してください。

- LMS, テレビ動画, 録画視聴に関する技術上の問題については, ラーニングテクノロジー開発室に質問するようにしてください。

〈ラーニングテクノロジー開発室〉

Tel: 028-627-7243

E-mail: LT-Support@LT-Lab.teikyo-u.ac.jp

Web サイト: <http://www.LT-Lab.teikyo-u.ac.jp>

〈テレビ会議(Collaborate) (A) について〉

- プライバシー保護と通信量削減のため, 映像は使用せず, 資料の画像を映しながら, 音声で解説し, コミュニケーションをとっていきます。
- 学生には, 講義内で音声をオンにして発言してもらったり, チャットに入力してもらったりします(ただしデバイスの不調でマイクが使えない場合などもありますので, その場合にはうまく答えられなくとも問題ありません)。「倫理学」は基本的にオンラインライブ講義の受講を推奨していますので, 音声機能が使えるように準備をしてください。
- 90 分間のうち, 前半 60 分はテレビ会議による講義を行い, 後半 30 分は内容を復習しながら小テストを受ける時間とします。
- なお, 通信が上手くいかないなどの不測の事態が生じ, テレビ会議に参加できないなどの問題が生じてもどうか慌てずに, B や C の手段でとにかく小テストに合格することを目指してください。

〈テレビ会議の録画(主に解説部分)視聴(B) について〉

- LMS 上で配布される講義資料を見ながら, 記録動画を視聴してください。なお, 記録動画は LMS の容量の問題があるため, 2 週間ほど経過したら削除する可能性があります。

〈講義資料を読む(C) について〉

- 通信設備がない, もしくは通信の制限があるプランに加入している場合でもどうか心配せずに, C の手段で講義に参加してください。

〈小テストについて〉

- 小テストで出題される問題は, 基本的なものに限ります。A・B・C のどの受講形態を選んだとしても, 成績は小テストでつけますので, 必ず講義時間後, 一週間の間に小テストを受け, 満点をとってください。
- 間違った問題を中心に必ずノートを取りましょう。

〈期末試験について〉

- LMS 上で期末試験を行います。

〈講義資料について〉

- どのデバイスでも開けるようにするため, またファイル容量が小さくなるようにするため, PDF で講義資料を配布します。
- テレビ会議での講義資料として使用するため, またスマホで見る学生が多いことから, 1 頁に 1 スライドで資料を作成しています。印刷する場合には複数スライドを 1 頁に印刷できるように設定することをおすすめします。

学生には上記のように LMS を通じて受講形態について周知し, 大きな混乱なく実施することができた。

5. 成果と残された問題

学生によるアンケート結果では, 受講形態を選択できることや, 同時双方型講義で教員や他の学生と対話できたことを喜ぶ学生が多く, 非常時の

講義方針としては成功を収めたと言える。特に、他者との直接の交流機会が途絶してしまった当時の状況において、同時双方型講義が心の拠り所としても機能していたと言えよう。

他方、他の講義で忙しい、アルバイトがあるなどの軽率な理由で C の受講形態を選択した学生が、著しく質の低いレポートを提出する問題もあった。また、講義内容に関しては、常識的なものの見方に潜む問題点や自分で考えてみる面白さを感じてもらうことはできたが、対面講義ほど十分な双方向の議論ができず、論理的・批判的思考力の涵養は例年よりも成果があがらなかった。特に、予想されていたことではあるが、同じ講義を受講しているとしても C の受講形態を選択した場合には、そのような能力を涵養することは困難であった。

また、同時双方型講義時の通信遅延を指摘するアンケート結果が多く、Blackboard Collaborate Ultra のシステム上の問題も目立った。Zoom で実施した他大学の講義では通信障害が少なく、他のシステムの使用を含めて柔軟に検討する必要がある。

また、資料だけでも十分に理解可能な質のものを作成し、同時双方向型の講義を実施できるよう機材やシステムに習熟し、さらにはその記録動画や毎回の小テストを用意しなければならない講義形式は、教員側に大きな負担があったことも無視できない。こうした講義形態は、幼い子どものいる教員の家族という見えにくいステークホルダーへの配慮を欠いていたとも言える。

6. おわりに

本稿で示してきたように、最も弱い立場のステークホルダーに配慮した講義形式を採用しなければならないとすれば、一見教員の講義形式の選択は自由になされうるように見えても、実質的には多くの講義が通信容量を十分に削減したオ

ンデマンド型の講義形式を採用せざるをえなかったと言える。おそらくは、多くの教員が個別にこうした倫理的問題を(明確にはなくとも)意識しながら講義形式の選択をしたと予想される。しかしながら、倫理的問題への配慮は各教員に任せられるというよりも、議論を通じて共通の指針を作成することが望ましかつたらう。2021 年度では、完全オンラインという状況は脱し対面講義も実施することができており、2020 年度と状況は変化している。だが、本稿のような倫理的視点からの分析は、今後同様の緊急事態が発生したときの指針を得るために不可欠である⁶。

参考文献

- [1] 小園晃司, “非同期型オンライン授業における〈情緒的紐帯〉の構築をめぐる一考察——2020 年度「比較文化 1, 2 における「文字資料」の配信を例に——”, 帝京大学ラーニングテクノロジー開発室年報, Vol. 18, pp65-72, 2021
- [2] 札野順・栃内文彦, “技術者が意思決定を迫られる状況とは(2)”, 札野順編, 新しい時代の技術者倫理, 放送大学教育振興会, pp51-67, 2015
- [3] 日本学術会議, “大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 哲学分野”, 日本学術会議, 哲学委員会, 哲学分野の参照基準検討分科会, 2016
- [4] ラーニングテクノロジー開発室 Newsletter No.52, “オンライン授業の課題”, <http://www.lt-lab.teikyo-u.ac.jp/activity/newsletter/newsletter52.pdf>, 2022/03/31 アクセス

⁶ ラーニングテクノロジー開発室[4]では、対面授業と比べてオンライン授業の修了率が低くなる理由の三つ目として、「満足な環境で受講できない学生の存在」を挙げている。

本稿はこの問題について倫理的観点からの分析を行ったものである。